とある物語と転生者達

疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある物語と転生者達

【Ｎコード】

Ｎ０７３５Ｗ

【作者名】

疾風

【あらすじ】

七月一日。物語はそこから動き始める。暴力の世界の技術を身につけ、零崎と化した少年、鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の力を手に入れ、怪異となった少女、過負荷を受け入れ、マイナスに堕ちた少女。三人の転生者に加え、幻想殺し、一方通行、禁書目録、超電磁砲、魔術師、風紀委員、第六位など様々な人間が交差し、物語は始まる。

駄文です。更新は不定期です。それでも構わないという方はお付き

合いください。

プロローグ　三人の転校生（前書き）

駄文ですが、それでも構わないというかたは是非お付き合いください。

プロローグ　三人の転校生

七月一日。

――とある高校――

「では転校生を紹介するのですよ～」

高校の教室に舌足らずな女の子の声が響く。
おそらく担任と思われるその女の子はそのまま扉のほうを向いて、

「それでは入ってきてください」

と、廊下に待機する転校生に呼びかけた。

――柵川中学――

「それでは入ってきてください」

中学校の教室。
教壇に立つ眼鏡をかけた教師が、廊下に待機している転校生に声をかける。

そして扉が開かれた。

――霧ヶ丘女学院――

小気味良い音がして黒板にチョークで名前が書かれる。
低めの身長を持つ転校生は、名前を書き終えるとこれからクラスメートとなる皆のほうを向いた。

――とある高校――

「三千院士気（さんぜんいんしき）だ。これからよろしく」

――柵川中学――

「姫野志織（ひめのしおり）です。仲良くしてね☆」

――霧ヶ丘女学院――

「『天川雪（あまかわゆき）。これからよろしく』」

三人の転校生はクラスメートの視線と注目を浴びながら言われた席に着く。

士気は黒い髪にツンツン頭の少年の隣に。
志織は花飾りをしたセミロングの少女の隣に。
雪は黒い髪の巫女装束が似合いそうな少女の隣に。

それぞれ座った。

転校生達と隣り合った三人は、折角の転校生ということで声をかけた。

七月一日。それは三つの高校に三人の転校生がきた日。
しかし三人の転校生は普通ではなかった。

一回不幸にも事故死してしまい、その後、
神様からある能力を貰って人生をやり直している転生者。

今、隣の生徒と談笑にふける三人は皆転生者だ。

これから三人はどのように物語に関わってくるのか。

三人の物語が、始まる。

プロローグ　三人の転校生（後書き）

続きはいつになるか分かりませんが、続きを読みたいと思われたかたがいましたら、気長にお待ちください。

プロローグ？　三人の転生者（前書き）

え～最初からだらだらと書き連ねてすみません。

グダグダですが最後まで読んでもらえると嬉しいです。

プロローグ？　三人の転生者

俺の名前は三千院士気。

七月一日、学園都市の外から中の高校へ転校してきた転校生にして、この世界に俺を含めて三人いるらしい転生者の一人だ。

前の世界、トラックにはねられて俺は死んだ。
そしたらなぜか神とやらに選ばれてこの世界に転生させてもらった。

この世界はどうやらラノベの世界のようで、ストーリーに関わると死ぬ可能性があるらしい。
なので神は万が一のことを考えて戯言シリーズと人間シリーズに出てくる、暴力の世界の能力と武器をくれた。（武器をしまうための暗器術もくれた）
あと零崎としての名前をくれた。

零崎全識（ぜろさきぜんしき）。

これが俺の零崎名だ。
西尾維新大好きな俺歓喜である。

まあ、そんなこともあって俺は転生した。

孤児院で育ち、普通に小、中と過ごした。
能力の実験のために不良と喧嘩もしたが、いたって普通の学生として過ごした。
苦労したことといえば湧き上がる殺人衝動を抑えるのが大変だった。
この世界には零崎一賊はないので人を殺したら即警察行きである。

そして高校一年の夏、孤児院の職員から学園都市へ行かないか？と言われた。
なんでも、超能力者を育成している機関だと言う。
この世界のストーリーはたぶんそこで展開しているのだろうと俺は直感でそう思った。
自分の能力を使って暴れまわりたいと前から思っていたし、ストーリーにも関わってみたかったし、なりより超能力という非日常的ワードに俺の好奇心がうずいていたので俺は学園都市に行くことにした。

そして今、俺は学園都市にいる。
これから繰り広げられるであろう非日常に、俺はわくわくしている。
目の前で話をしている上条とかいうこいつも超能力を使うと思うと興奮する。
これからが楽しみだ。

私の名前は姫野志織。

七月一日、学園都市の外から、中の中学校に転校してきた華の女子中学生にして、私以外にも二人いるという転生者の一人。

前のわたしの人生、それは飛行機の墜落事故ということで幕を閉じた。

気づいたら一面真っ白な空間にいた。（ハガレンの真理がいる場所みたいな感じ）

そしたら自分のことを神だ。とかいう人と出会って、その人にこの

世界へ転生させてもらった。

なんでも、この世界はバトルが繰り広げられるライトノベルの世界らしい。
話に関わっても大丈夫なようにと、神様から物語シリーズに出てくるキスショットと同等の力を貰った。

まあいくつかの弱点と人間を食いたいという食欲、あと吸血殺し（ディープブラッド）？とかいう吸血鬼を殺す能力にひきつけられてしまう、という日常生活に支障をきたすことを取り除いたかわりに身体能力が少し落ちちゃったらしいけど。

そしてわたしは赤ん坊の状態で転生した。

なんでも、わたしは孤児院の前に捨てられていたらしく、職員の人に拾われたらしい。
そしてそのまま育った。

小学校では自分の力を使って、いじめっ子とかを蹴散らしたりとかした。（もちろんギリギリまで手加減して）

そんなことをしてたからか、わたしのまわりには常に大勢の友達がいた。

そして中学生の夏。わたしは学園都市に行くことになった。
前々から超能力には興味があったし、なにより、力を全力、とは言わなくても半分ぐらいは使ってみたいと思っていたし、使っても問

題はなさそうな場所なので、わたしは職員の誘いにＯＫした。

わたしは今学園都市にいる。
今喋ってる佐天ちゃんを始め、まわりの人達も良い人そうだし、超能力は早く見てみたいし、この世界のストーリーも気になる。

ああ、これからが楽しみだ。

『僕の名前は天川雪』

『七月一日、霧ヶ丘女学院という学校に転校してきた女子高生にして、僕の他に二人も存在する転生者だ』

『転生する前、つまり前の世界で僕は不運なことに、駅のホームで足を滑らせて電車にはねられてしまった』

『そしたら自分を神と名乗る謎の男性に転生させられてしまった』

『おっとこの言い方だと転生が不満だったように聞こえるかな？別に転生が嫌だったわけじゃない。むしろ感謝している』

『ただ、この世界の事件やそれに伴う戦闘に耐えうるために与えられた能力が過負荷（マイナス）だったのが不満といえば不満かな』

『週間少年ジャンプを愛読していた僕はめだかボックスも読んでいたわけで、過負荷や球磨川はかなり好きだったのだが、実際、なってみると結構辛いんだよね』

『例えば、新しい人生ということで、前の世界に数人しか出来なかった友達を作ろうと思っていたのだが、過負荷の気持ち悪さのせいでわずかな人数しか出来なかった。とかね』

『まあ親友と呼べる人が出来たからいいんだけどさ』

『ともあれ、僕は転生した後、学園都市の孤児院に拾われた』

『なんでも、学園都市の外から帰ってくるときに捨てられていたとか』

『そしてそのまま僕は孤児として、小学校、中学校と過ごしていった』

『そして高校一年生の夏』

『車と車が事故を起こしていたので、車の損傷を大嘘憑(オールフィクション)きを使って修復してあげたんだ』

『その時はすぐに帰ったんだけど、後日』

『研究員が僕の部屋へ押しかけて君の能力を研究させてくれっていってくるんだ』

『どうやら事故を起こしたのが研究場で働いている研究員だったようで、僕の能力がどうしても気になったらしい』

『断ることも出来たんだけども提示された金額に思わずＯＫしてしまったんだ』

『すぐに研究場に連れて行かれて、実験が行われ続けた』

『そして、通っていた学校が異常な能力の研究に力を入れてる霧ヶ丘女学院に変えられてしまったんだ』

『今僕がいるこの学園都市』

『神が言っていたような事件も戦闘も起こらない、いたって平穏』

『友人はできなかったど親友はできた』

『過負荷である僕にはこの程度で満足だ』

『今日もそうだ。過負荷の僕に話しかけてくれる。そんな姫神さんをはじめとしたクラスメート達と出会えた』

『まあ最初だけだと思うが、これから彼女達が僕に対する態度をどうするか』

『ふふふ。楽しみだ』

三人の転生者は、それぞれ同じ思いを抱き、
物語へと関わってゆく。

プロローグ？　三人の転生者（後書き）

・三人は原作知識がない。
・三人はそれぞれの顔と名前と能力を知らない。

まあ、三人の共通する設定はこんなもんです。

読んでくださった方、ありがとうございます
次回もいつになるか分かりませんが、待って頂けると幸いです。

第一話　それぞれの放課後（前書き）

え～これからオリジナルストーリーに入る予定です。

毎度のごとく駄文ですが、少しでも楽しんで頂けば幸いです。

第一話　それぞれの放課後

――三日前　　七月二十八日――

ここは第七学区にある廃ビル一室。
そこにはざっと二十～二十五人ぐらいの人間が集まっていた。

名門と呼ばれる学校の制服を身に纏っているもの。
不良のような出で立ちをしているもの。
髪を染めているもの。
大学生ぐらいの年齢のもの。

様々な人間が、男女、年齢の区別もなく、隣のものと話をしていたり、携帯をいじっていたりなど思い思いに過ごしていた。

「東谷（ひがしたに）さん、東谷さん。手に入りましたぜ。例のあれ」

その中で老け顔の男が金髪の東谷という男に話しかけ、紙の束を手渡した。
東谷は、それを受け取って紙の束をパラパラとめくる。

一通り目を通すと、東谷はその強面を歪め、獰猛に笑った。

「でかした戸雲（とぐも）」

戸雲と呼ばれた男は、一礼するとそそくさと離れていった。

「さあ、これで準備は整った」

東谷は顔に狂気の表情を浮かべたままつぶやく。

「覚悟しろよ・・・。無能力者（レベル０）共」

そして三日後。

七月一日。

それは三人の転生者が三つの高校に転校してきた日であり、
高位能力者によるレベル０襲撃事件がもっとも激しさを増してきた日である。

□

――第七学区
とある路地裏――

姫野志織は失望した。

楽しみにしていた超能力をまさかこんな形で見ることになるとは。
そしてその能力をこんなことに使うとは。っと。

現在、彼女の周りには四人の人間が居る。
隣に怯えてる佐天。
目の前にはどこかの制服を着ている三人の男。

（面倒なことになった）

はあ。っと志織は溜息を吐く。

放課後。一緒に帰ることになった佐天が、近道だからと言って路地裏を通ったのが全ての始まり。
半ばまで進んだところで、三人の男に絡まれてしまったのだ。

（しかし・・・。佐天ちゃんの震えっぷりが半端ないなあ・・・）

と、そこまで考えて志織は思い出す。

（あー・・・。たしか初春ちゃんが言ってたレベル０の襲撃事件とか言うやつか）

ここ数日の間に起きた高位能力者の犯行と思われる無能力者の襲撃事件。
スキルアウトを中心に、多くの無能力者が被害にあったという。
後遺症が残るほど傷つけられたものは居ないが、被害者は今も入院しているという。
犯人はまだ捕まっておらず、風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）が事件解決のために奔走している。

これが志織が初春から聞いた、事件の顛末である。

（佐天ちゃんが今にも倒れそうなぐらいに怯えてるのはそういう訳か）

あくまで冷静に、志織は現状を分析する。
分析を終えたところで志織はまた溜息を吐く。

（面倒だ・・・）

「お譲ちゃん達よー」

「無能力者たちの襲撃事件って知ってっか？」

「実はその犯人・・・。俺らなんだよ」

下品に笑いながら男達は距離を詰めてくる。

「お前らの選択肢は二つ。俺達と楽しく遊ぶか、痛い目見て病院送りされちゃうか」

「どっちがいい？」

そのとき志織の手がやわらかい感触を感じた。
見ると、佐天が志織の手を強く握っていた。

それを見た志織は行動を開始した。

「死ね」

「あん？」

「なんだって？」

志織の言葉に反応して三人は足を止める。

「死ね。と言ったのよ。あんた達みたいなゲスは世界中の女子から嫌われて死になさい」

突然の暴言に佐天は驚き、三人は激怒した。

「んだと・・・」

「てめぇ！自分の立場が分かってんのかぁ！」

「どうやら痛い目にあいたいようだな・・・」

三人はそれぞれの能力を行使した。
前方に居る右の男は掌から炎を出した。
後ろの男は地面に落ちていたコンクリートブロックを、手も使わず持ち上げた。
そして前方の左の男は手に氷の剣を創り出した。

どれも高レベルの超能力である。

「どうだあ。今謝ればまだ許してやるぞ」

一時は逆上したが、自分達が絶対的に優位であることを改めて認識し、落ち着きを取り戻したようだ。

普通の無能力者ならばここで謝ってしまうだろう。

が、志織は普通ではなかった。

「誰が謝るか。早く死ね」

「・・・！！」

「こ、の、クソガキィ・・！」

「ぶち殺す」

三人のうち氷の剣を創り出した男が飛び掛ってきた。

その手にした鋭利な氷を振り上げる。

それに対して志織がとった行動は一つ。

回避でも防御でもなく、迎撃。

具体的には男が氷を振り下ろす前に距離を詰め、
男の額にでこピンをかましたのである。

たかがでこピンといっても、吸血鬼の力を使ったでこピン。
手加減をしていても人を一人吹き飛ばすぐらいの力は充分にある。

よってその男は、ノーバウンドで路地の外まで吹き飛ばされ、
そのまま道路に止まっていたトラックの荷台に思いっきりぶつかった。

「第三の選択肢だ」

残りの二人も、佐天も何が起こってるのか分からないというようにポカンとしている。
それらの反応を無視して志織は淡々と言葉を続ける。

「あんた達が病院送りだ！」

先程までの佐天の震えが今度は二人に移った

「ば、化物・・・」

「に、逃げろー！！」

ようやく状況を理解したらしく、残った二人は能力の使用をやめ、

志織達から背を向けて駆け出した。

「逃がすか！」

「待って！」

すかさず後を追おうとする志織だったが、それは阻まれた。
駆け出した志織の手を、佐天が引っ張る。

「あ、足がすくんじゃって・・・。ごめん」

よっぽど怖かったのだろう。
佐天はその場にへたり込んでしまった。

「う～ん。そうだね」

それを見た志織は少し考え込むと笑って言った。

「クレープでも食べて帰ろっか」

□

「『と言う訳で、今から君の家に行こうと思うのだが』」

「どォいうわけだ」

第七学区の歩道を二人の男女が歩く。
状況だけ見れば仲睦まじいカップルに見えるが、それはあくまで状況だけだった。

女のほうは転生者の一人、過負荷を有する美少女天川雪。
男のほうは白い短髪、細い体、赤い瞳。手には大量の缶コーヒーがつまったビニール袋を持っている。

「『いやあ下校途中にコンビニの前を通ったら君が居たんでね。それで久しぶりに君の家へ行こうと思ったんだよ』」

「嘘をつくンじゃねェ。お前が転校した霧ヶ丘女学院は一八学区にあるだろうが。・・・まあ、別に構わねェが」

「『流石、学園都市最強の一方通行。気前がいいね』」

一方通行。その名前を知っている人間からは羨望。彼と対峙したことのある人間からは恐怖の眼差しを向けられる学園都市最強の超能力者。

彼がその一方通行であった。

「『それじゃあお邪魔させてもらうよ』」

「好きにしろ」

そのとき。

ドゴォン！という轟音が二人の後ろから響いた。

雪が後ろを振り向くとそこには異様な光景が広がっていた。

「『見てみなよ一方通行君。なんと道路に止まっていたトラックの荷台に人が激突したようだよ。とても滑稽だね』」

雪の言葉に一方通行は少し後ろを向くと、すぐ前に向き直った。

「どォせ喧嘩だろ。よくあることじゃねェか」

「『それにしても人一人をあそこまで吹き飛ばすのは凄いと思うね。よっぽどの高位能力者の仕業かな？やっぱり今流行の無能力者狩りかな』」

そんな会話をしながら二人が曲がり角を曲がったそのとき。

「すごいパーンチ」

という掛け声と轟音が響いた。

「・・・なンの騒ぎだァ？」

「『ん？あれは・・・？」

□

「どうしてこうなった・・・」

上条当麻は頭を抱えてうなった。

場所は第七学区の通り。

上条の前では二人の男が喧嘩をしている。

片方は転生者の一人。三千院士気。

もう片方は白ランを着た同い年くらいの削板と名乗った少年。
喧嘩といってはいるが、実際は刃物や能力を使った、凄まじい戦いとなっている。

（そろそろ風紀委員（ジャッジメント）がくるのころかな・・・）

先ほど喧嘩を止めようとしたが、二人に絶対に止めるなと凄まれたため、とりあえずどっちかが大怪我をしそうになったら止めようと先ほどから傍観を続けていた上条であった。

（しかし三千院の奴・・・。こっちに来る前は鍛えていたとか言ってたけど・・・。あの動きは凄まじいな・・・）

士気と二人で帰った放課後。
最近はやっているという無能力者の襲撃事件の現行犯を見つけた二人は、協力して被害者を逃がし、上条の幻想殺しと士気の転生者としての身体能力で三人と戦った。

上条の幻想殺しで能力を打ち消された後に、士気が殴り倒す。
もともと能力に頼りきりだったため、接近戦には対応できず、三人は一方的にやられていた。

が、その時。

三人と、三人に鉄拳をくわえている二人を見た削板がその状況を誤解。
罪のない一般人を痛めつけている不良のように見えてしまったらしく、
三人を逃がすと二人の前に立ち塞がったのであった。
そのまま決闘ということになり、現在に至る。
改めて現在の状況を確認して上条は一言つぶやいた。
「・・・不幸だ」

□

士気はこの状況を大いに楽しんでいた。
まさか全力で暴れても問題ないような相手と一日目で会えるとは。
と。

「すごいパーンチ」
削板が虚空へと拳を突き出す。
それだけのことで。
「・・ッ！？」
士気の体に衝撃が襲い、ノーバウンドで数メートル吹き飛ばされた。
そのまま道路に勢い良く叩きつけられる。
「三千院！」
上条が駆け寄ってくるが士気はそれを片手で制した。
「大丈夫大丈夫。このくらいじゃやられねえよ」
立ち上がった士気は、懐から新たに二本ナイフを取り出すとそのまま削板に向けて突っ込んだ。
「ほう。まだ立ち上がるか。なかなか根性のある奴だな」
「四本もナイフが刺さったのに普通に動いてるお前のほうがすげえよ！」
右へ左へ緩急をつけながら動き回る士気は、
手に持ったナイフを一本、削板の顔面へと投げる。
削板はそれを指でキャッチした。

「む？」

指ではさんだナイフを地面に捨てたときには、士気が視界から消えていた。

「どこだ？」

その時。

どすっ！

削板の背中に何かが突き刺さった。

「ぐっ・・・。ああ・・」

ナイフで視界を封じた一瞬の間に、士気は後ろに回りこみ、懐から巨大な刃物を取り出し、そのまま削板の背中へと突き刺したのだった。

その巨大な刃物とは、奇怪な大鋏。自殺志願（マインドレンデル）。

ズルリ。

背中から大鋏が引き抜かれた。

「三千院！！」

流石に見てはいられらくなった上条が駆け出してくる。

「大丈夫だ上条」

士気は、鮮血に染まる大鋏を見ても動じず、淡々と、冷静に告げた。

「この程度じゃこいつ死ぬどころか動きを止めるのも無理っぽい」

あきれたような声を出しながら士気は自殺志願をしまった。

しかし士気は、劣勢であるはずなのだが、楽しんでいるようににやりと笑った。

さあてどうしたもんかな？

第一話　それぞれの放課後（後書き）

少し中途半端です。

読んでいただきありがとうございます。

第二話　人通りの少ない通りにて（前書き）

最近バッカーノ！にはまっていまして・・・。

あのような面白い話をかけないかな～と思ってこの小説を始めたのですが、やっぱり足元にも及びませんねｗ

成田先生は本当に凄いですね。

そんなわけで二話です。

第二話　人通りの少ない通りにて

「『久しぶりだね。削板君』」

士気が作戦を練っていたそのとき、削板へと声をかけた人物がいた。

過負荷の転生者、天川雪である。
一方通行の寮に向かっていた二人は、曲がり角を曲がった直後喧嘩（本人達曰く決闘）の現場に出くわしたのである。

その後雪は、過負荷であるのに普通に接してくれる削板に声をかけたのである。

「おう！天川か！久しぶりだな！」

その声に削板は相変わらずのテンションで答えた。

「『ふむ。様子から察するに・・・。喧嘩かな。しかし対外の相手を瞬殺する君がそこまでの傷を負ってるなんて珍しいね・・・』」

冷静に状況を分析した雪は、軽く考え込んでいると、
その顔を見た一方通行が察したように、

「俺は先に行ってるぜ」

と言って士気や削板の脇を通って歩いていった。

「『ありがとう。一方通行君』」

静かにつぶやくと、雪は、削板のほうへ向き直っていった。

「『削板君、その喧嘩、僕も見物していいかな？』」

「うん？別に構わないぞ」

「『そう。なら見させてもらうよ』」

雪はそのまま上条のところへ歩いていった。

「もういいかな？続きを始めても」

今までの会話を黙ってみていた士気だが、我慢の限界が来たようだ。

対する削板も、続きを始めたくてうずうずしていたようで、

「おう！待たせたな！」

と、臨戦態勢に入った。

□

「なあ・・・。お前はあいつの知り合いか？」

再度始まった喧嘩を見物しながら、上条は隣に立つ雪へと声をかけた。

「『ああ、彼とは仲の良い友人・・・と、言える関係かな』」

激闘を繰り広げる二人を見ながら、雪は淡々と答える。

「『このわたしに普通に付き合ってくれる数少ない人間だよ。対外の人間は僕に嫌悪感を示してしまうんだよ。君も感じているだろ？何か得体の知れない気持ち悪さのようなものを』」

「・・・？いや、別に？」

上条の返答が意外だったようで、意外そうな顔をする雪だったが、上条はそのままさらに質問を重ねる。

「・・・えーと、なんでこの喧嘩を見物しようと思ったんだ？」

「『・・・質問を質問で返すのは悪いが、ええと君、名前はなんていったかな？』」

急に名前を聞かれたので若干戸惑った上条だったが、普通に答えた。

「上条。上条当麻だ」

「『そう。では上条君。君のレベルはどのくらいかな？」

「レベル・・・？」

質問の意図が分からなかったが、これも普通に答えた。

「俺は無能力者だ。」

正確には、彼の右手に幻想殺しという力が備わっているが、
超能力ではないため無能力者とされているのである。

「『そう。それでは削板君のレベルは分かるかな？」

「あいつの・・・？」

眉をひそめながら上条は二人の戦いを思い出す。

拳を突き出しただけで離れた場所にいる士気を吹き飛ばす謎の力。
ナイフが突き刺さったにも関わらず、普通に引き抜き、前と同じ動きをする耐久力。

その他人間を超えた身体能力。

「大能力者（レベル4）クラスかな？」

学園都市に三人しかいないと言う肉体変化系の

上位能力者だろうと思った上条だが、その予想は外れた。

「『超能力者（レベル5）の第七位だよ。彼は』」

「へえ～超能力者ねえ・・・・ってええええええ！！」

あまりの衝撃の事実に驚く上条を無視して、雪は続ける。

「『それでね、さっきの質問の答えだけど超能力者である彼にたいして善戦をしているあの少年が気になってね。一体何者だい？彼は』」

その質問に上条は答えられなかった。

（そうだ。そもそもあいつとは会ってまだ一日もたっていない）

上条はどこからか取り出した釘バットを振り回している士気を見ながら考えた。

（一体あいつは何者だ？）

□

御坂美琴は考えていた。
先ほど見た女の子について。

無能力者襲撃事件。

路地裏で、その現場を発見した美琴はそのまま助け出そうと路地裏へ足を踏み入れた。

が。

襲われていた同い年ぐらいの少女が、飛び掛ってきた男へとでこピンを打ち込んだと思った瞬間。

その男は路地の向かいまで吹き飛ばされた。

あまりの衝撃的な光景に思わず呆けてしまった美琴は、
そのまま声をかけることもできず、結局二人の少女は行ってしまったのだった。

（・・・おかしい）

その光景に、美琴は不信感を抱いていた。

（無能力者襲撃事件は本当に無能力者意外は襲わないのに・・・）

現在、行われている無能力者襲撃事件。
これは学園都市に数多く居る人間の中から正確に無能力者だけを割り出して襲撃している。

低能力者（レベル1）や異能力者（レベル2）ですら襲わない。
まして、人一人を吹き飛ばす程の高位能力者を襲うことなんてない。

（黒子曰く・・・。書庫（バンク）にハッキングして能力者のデータを奪ったらしいけど・・・）

美琴が考えながら歩みを進めていたそのとき。
人通りの少ない通りから何かが砕ける音が響いてきた。

思案にふけっていた美琴は一気に現実へと引き戻される。

（なに・・・？喧嘩？）

横を向いた美琴の、その視界が特徴的なツンツン頭を捉えた。

（・・・！！あの馬鹿じゃない！！）

美琴の足が路地裏へと向かう。

□

――くそっ！なんなんだあいつらは・・・。

無能力者襲撃事件の犯人グループの一人はそう、心の中で毒づいた。

いつものとうり一人の無能力者を三人で襲った。
力のない人間を自らの手で叩き潰す。
リスクのない暴力ほど気持ちの良いものはない。

だから標的として定めた人間を路地裏でかこった。
愉悦に浸りながら能力を使用したその時。

二人の男の乱入によってそれらが全て滅茶苦茶にされた。

能力を片方の男が打ち消したところでもう片方が自分達をぶん殴る。

能力が通じないという異常事態の前に為すすべもなく、ぼこぼこにされていた三人の前にさらなる乱入者が現れる。

――やけに暑苦しい奴だったな・・・。

とにかくその乱入によって生じた混乱に乗じ、三人は逃げ出したのだった。

――とりあえずこのままじゃ腹の虫が収まらねえ。

そのとき。

他の仲間と共に壁に寄りかかっていた三人の前のほうから、
同じ犯人グループの一員が走ってきた。

二人は、三人を見つけるとこちらへ向けて速度を上げてくる。

――丁度いい。あいつらを加えて五人で袋叩きだ。

第二話　人通りの少ない通りにて（後書き）

読んで下さったて本当にありがとうございます！

こんな小説ですが、少しでも皆さんの暇つぶしにでもなればなあと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0735w/

とある物語と転生者達

2011年10月8日14時07分発行